

# 埼玉古墳群周辺の範囲確認調査

西口正純・佐藤康二

## はじめに

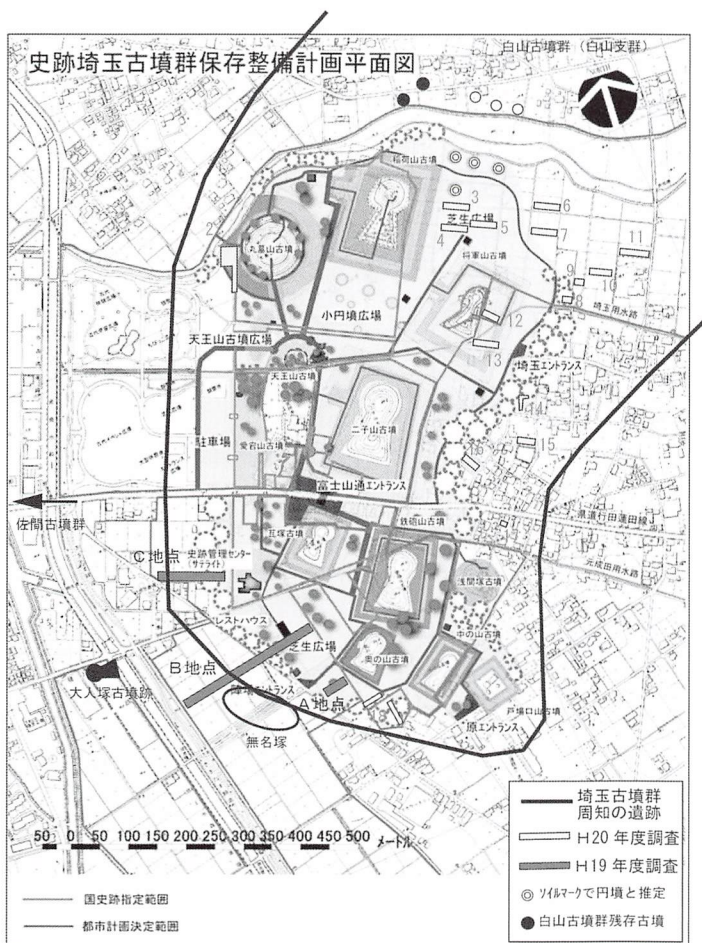
史跡埼玉古墳群は、平成元年に追加指定を受け現在の指定面積は22.3haとなっている。しかし埼玉古墳群に捉えられる古墳とされながら、未指定の古墳や部分的な指定範囲の古墳があり、包括的な埼玉古墳群として十分な指定範囲にはなっていない。

そのため、古墳群の範囲を確定し指定範囲の拡大を検討するための基礎資料を得るために平成19年度に古墳群西側の範囲確認調査を行った(西口2009)。さらに平成20年度も行田市および行田市教育委員会の協力を得て、この調査を継続して丸墓山古墳周辺から稲荷山古墳、將軍山古墳と二子山古墳の東側、奥の山古墳南側にかけての私有地16地点について、地権者の承諾を得て試掘調査を行い、古墳の分布範囲の確認と周辺の地形調査を実施した。

## 平成19年度の範囲確認調査

平成19年度は、奥の山古墳から博物館西側にかけて3地点を調査した。いずれの地点においても低湿地であることが確認され、古墳群を乗せる台地には南側の陣場遺跡周辺を頭に旧忍川に向かっ

て大きく谷地形が入り、西側の武蔵水路側において再度ローム台地が形成されていることが分かった。この武蔵水路側の台地上には、大人塚古墳を含む佐間古墳群が展開しているが、埼玉古墳群との間には大きな地形の変換点があるため、埼玉古墳群の西側への連続性はないことが判明した。これが平成19年度調査の大きな成果であった。

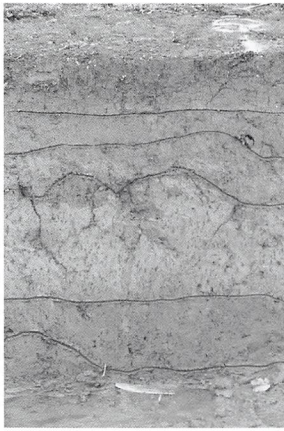


第1図 平成19・20年度調査トレンチ配置図

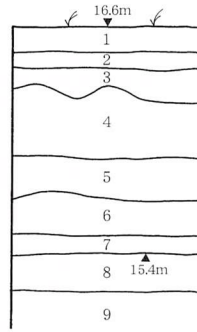
## 平成20年度の調査

平成21年2月2日から3月26日にかけて16地点の調査を実施したので、以下順次その内容について述べてい

1地点は私有地化されている部分であるため、丸墓山古墳西側に広めの調査区を設定した。現状は、周堀の復原は行われていないが、平成11年に3本のトレンチと、平成15年に4本のトレンチ調査が行われている。このうち平成15年に調査



1 トレンチ検出状況



- 1 灰褐色土
  - 2 橙灰色土
  - 3 黄褐色土
  - 4 灰褐色土
  - 5 橙灰色土
  - 6 黒灰色土
  - 7 灰白色土
  - 8 暗黄褐色土
  - 9 橙褐色土
- ロームブロックを主体に、灰褐色土を少量含む。やや粘性がありよくしまる。二次堆積土層。  
鉄斑粒子を多量に含む、粘性強くよくしまる。  
灰褐色土を基本に、鉄板を多量に含む。粘性が強くよくしまる。  
黒色粘土粒子を多量に含む、粘性が強くよくしまる。  
黒灰色土粒子を少量含む、粘性強くよくしまる。  
均一で混じりがなく、堅くよくしまる。  
基本的に8層と同じだが、色調がやや灰色である。

第2図 1 トレンチ土層断面図 (1/40)

を行った第3トレンチでは、暗青灰色粘土層の下に若干の埴輪片と黒褐色土が検出され、堀底最下層の堆積土と判断しているが、今回の調査では再確認することができなかった(教育普及・調査研究担当2005)。今回の確認

調査では、黒灰色土を10cmほど下げた面<sup>(1)</sup>での確認を行ったが、周堀の覆土およびプランは確認で

きなかった。土層観察の結果3層までが耕作土と耕地整理で動かされた土層で、4層以下が自然堆積土層である。5層以下は粘性が強く鉄斑を多く含んでいることから湿地性の土壤であることが分かる<sup>(2)</sup>。出土遺物は、埴輪細片が散発的に出土しているが、周堀プラン内での出土ではないことから、周堀は大半が旧忍川の氾濫等で消失したのではないかと想像している。

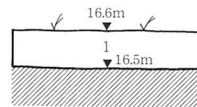
2 地点は、諸事情により調査できなかった。

3 地点は、稻荷山古墳の外堀の東約30mの地点にあたる。昭和44年撮影の航空写真によるソイルマークにより古墳と推定される箇所の約50m南である。幅1m長さ45mのトレンチを設定した、現況は最も低い水田面で標高が約16.7mである。表土下20cmでローム層を検出できるが、遺構・遺物は検出できていない。

4 地点は、3地点の南で水田面が1段高くなっている。幅1m、長さ17mのトレンチを設定し地表から110cmでローム層が確認できるが、遺構・遺物は検出できていない。

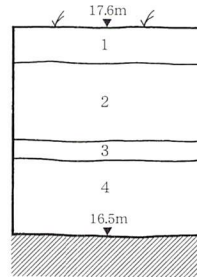
5 地点は4地点の東に接して、幅1m、長さ22mのトレンチを設定したが、ほぼ4地点と同じく地表から115cmでローム層が検出される。遺構・遺物は検出されない。

6 地点は、稻荷山古墳から200mほど東で、低い水田面である。幅1m、長さ23mの東西方向に長くトレンチを設定したところ、西から東へ



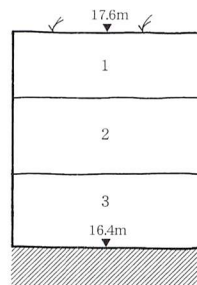
- 1 耕作土

第3図 3 トレンチ土層断面図 (1/40)



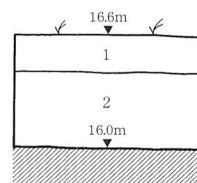
- 1 耕作土
  - 2 暗茶褐色土
  - 3 灰褐色土
  - 4 暗黒褐色土
- ローム粒子を僅かに含み、粘性がある。  
ローム粒子を多く含み、粘性がある。  
ローム粒子を少量含み、粘性がある。

第4図 4 トレンチ土層断面図 (1/40)



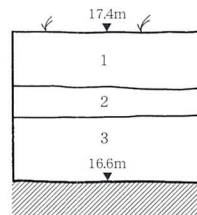
- 1 耕作土
  - 2 灰褐色土
  - 3 黒褐色土
- ローム粒子を多く含み、粘性がある。  
灰褐色土及びロームブロックを少量含み、粘性がある。

第5図 5 トレンチ土層断面図 (1/40)



- 1 耕作土
  - 2 黒色土
- 腐食土層、しまりなく粘性がある。

第6図 6 トレンチ土層断面図 (1/40)



- 1 耕作土
  - 2 暗茶褐色土
- ローム粒子を僅かに含み、よくしまり堅い。

第7図 7 トレンチ土層断面図 (1/40)



40cm低くローム層が傾斜した状況で確認された。遺構・遺物は検出されていない。

7地点は、幅1m、長さ22.5mのトレンチを設定した。地表下80cmでローム層を検出し、トレンチ西側で幅1m深さ55cmの南北に延びる溝を検出した。出土遺物は、陶磁器1片で遺物と覆土の状態から近世以降のものであると判断した。

8地点は、攪乱のため調査ができなかった。

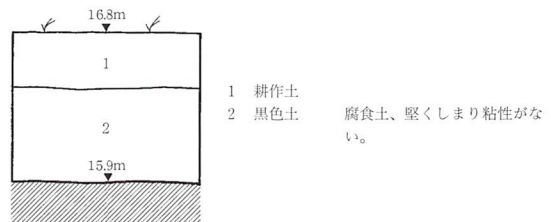
9地点は、幅1m、長さ11mの東西方向のトレンチで、西側は地表下36cmでローム層を検出したが、東側ではローム層の検出が地表下82cmとなり、ローム層上に黒色腐食土が堆積していた。このことから、西から東に地形の傾斜があることが推定できた。

また9トレンチの東に設定した10トレンチは、幅1m、長さ24mで、東側では地表下24cmでローム層を検出したのに対して、西側では47cmでローム層となり9トレンチ同様ローム層上に黒色腐食土が堆積していた。この状況から、9トレンチでは、東から西に向かって地形の傾斜が確認され、9トレンチと10トレンチの間に幅の狭い谷地形が埼玉地区を頭に旧忍川に向かって形成されていることが分かった。

11トレンチは、幅1m、長さ37m現地表下20cmでローム層を検出した。トレンチの東端に幅1.5m、深さ70cm断面U字形の溝がトレンチを横断する形で検出された。出土遺物はないが、覆土の状況から近世以降のものと判断される。ローム層上の標高は、16.36mで9トレンチの最低標高の15.97mに比べて高く、地形が上昇していることが推察できる。

12トレンチは、將軍山古墳のくびれ部付近東側に設定した。幅1m、長さ26mの東西方向のトレンチで、トレンチ西端から9mで内堀の中堤側の立ち上がりりと23mで中堤から外堀への落ち込みを検出した。内堀の深さは、約40cmで、外堀は用水路に切られているために、堀底まで検出することはできなかった。中堤の幅は、14mである。將軍山古墳東側で検出されている周堀とほぼ対称の位置で検出された。掘り底の確認のため覆土の一部を調査し、円筒埴輪細片が出土している。將軍山古墳の史跡指定範囲は、古墳本体（一部）となっているため、東側の周堀が確認されたのは今後の指定範囲を検討するうえで意義が大きい。

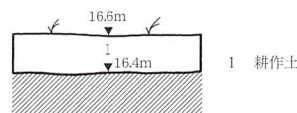
13トレンチは、行田市教育委員会が排



第8図 9トレンチ土層断面図(1/40)



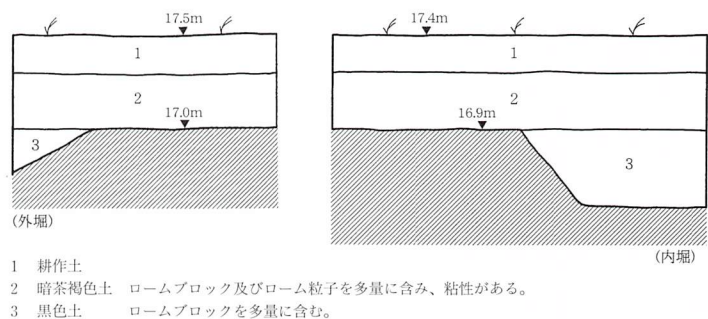
第9図 10トレンチ土層断面図(1/40)



第10図 11トレンチ土層断面図(1/40)



12トレンチ検出状況



第11図 12トレンチ將軍山古墳内堀・外堀土層断面図(1/40)

水溝工事に伴って調査を行った地点である。將軍山古墳の南東コーナー付近にあたり、かなりの削平を受けていたが内堀・外堀・中堤の一部を確認している<sup>(3)</sup>。

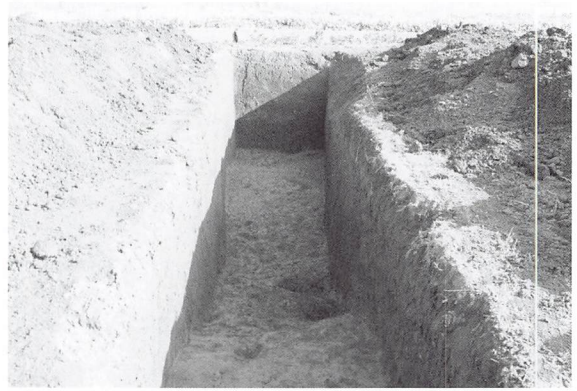
14トレンチは、「シャングリ山」と呼ばれ古墳跡と考えられていた地点である。民家となっているため、その南側にトレンチを設定した。古墳跡とされる箇所に近い場所で底面が平坦で最深部が約50cmの溝が検出された。古墳跡であることを予想して調査を行ったが、出土遺物には、鬼高の土師器坏小片が出土しているが、須恵器、布目瓦などが同時に出土していることから古墳の周堀ではなく8世紀以降の溝であると判断し、「シャングリ山」は古墳の可能性が低いと考えられる。出土遺物1は、須恵器坏で底径7.2cmである。底部は糸きりで、外縁にヘラケズリを行っている。白色の針状粒子を含む南比企産である。2は平瓦で、右側に端部の一部が残る。色調は橙色で酸化焼成である。このほかに溝に伴わないが、埴輪小片が2点出土している。

「シャングリ山」(山王山)については、「史蹟埼玉」(1936)では「山宮墳址」との記載があり、古墳跡との認識であった。その後「丸墓山古墳周辺の円墳分布状況」(1978)では、現白山愛宕山古墳が「シャングリ山古墳」とされており、今回「シャングリ山」としている箇所が「山宮古墳」と記載され、混乱がみられる。埼玉県古墳詳細分布調査報告書(1994)では、「山宮山古墳」として正式に古墳として扱われている。今回の試掘地点のすぐ南に所在する「鎌田氏館」を調査の際検出した溝の底面から須恵器が出土したことから、直径20mの「山宮南古墳」と仮称し、この北の「シャングリ山」を「山宮古墳」としている(斎藤国夫・門脇信一1999)。このように呼称が一定していないが、地元で「シャングリ山」とよばれていることと埼玉県古墳詳細分布調査報告書において「山宮山古墳」(シャングリ山古墳)と扱われていることから、試掘地点は「シャングリ山」と呼ぶこととした。

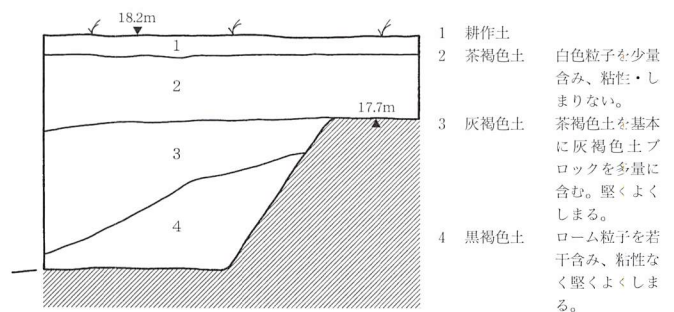
15トレンチは、二子山古墳の約200m東で埼玉地区の中心にあたる部分に設定した。幅1m、長さ26mのトレンチである。地表下1.3mでローム層を確認したが以前宅地となっていた部分で、攪乱が多いため、正確な地山面の確認はできなかった。

16トレンチは、二子山古墳の東100mの位置で、幅1m、長さ27.5mの調査を行った。地表下約60cmでローム層を確認し、溝3条を検出した。溝の覆土は、ロームブロックとローム粒子を多く含みしまりがなく層であるため、近世以降のものと判断される。出土遺物はない。

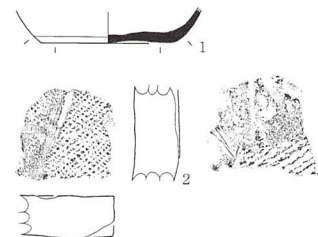
17トレンチは、浅間神社(浅間塚古墳)北側にあたり、



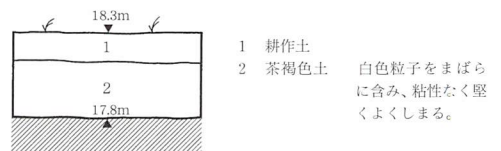
14トレンチ溝検出状況



第12図 14トレンチ土層断面図(1/40)



第13図 14トレンチ溝出土遺物(1/4)

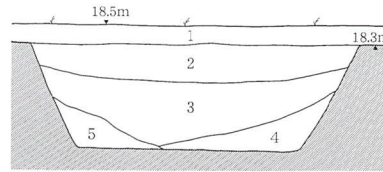


第14図 16トレンチ土層断面図(1/40)



現状は駐車場として使用されている。幅1m、長さ12mの調査を行った。地表下1.6mでローム層を確認しているが、ローム層上は、攪乱であった。

18トレンチは、奥の山古墳の前方部東方側と南方側の2箇所を設定した。18-1トレンチは、幅1m、長さ41.5m、18-2トレンチは、幅1m、長さ20mである。ともに耕作土下に幅3～4m、深さ約90cm、断面U字形で底面が平坦の溝を検出した。遺構としてしっかりした溝であり、出土遺物に陶磁器があり近世以降の溝である。



- 1 耕作土
- 2 茶褐色土 白色粒子を若干含み、粘性なくよくしまる。
- 3 黄暗褐色土 茶褐色土を基本にローム粒子を多量に含む、粘性なくよくしまる。
- 4 暗茶褐色土 ローム粒子を多量、ロームブロックを少量含む。やや粘性がありよくしまる。
- 5 黄褐色土 ロームブロックを主体にローム粒子が少量混じる。粘性がありよくしまる。

第15図 18-2 トレンチ土層断面図 (1/80)

## まとめ

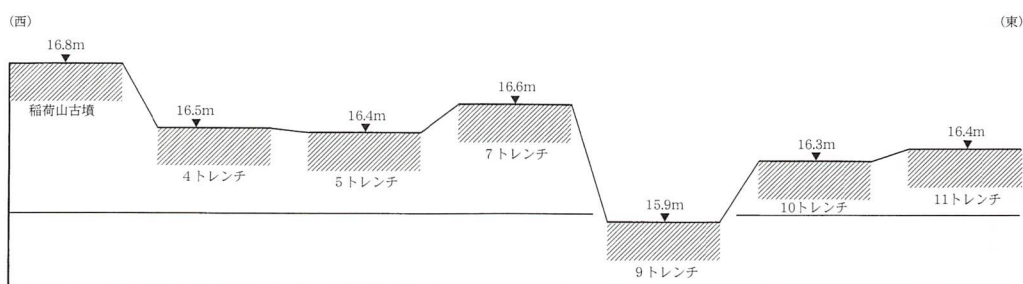
丸墓山古墳の西側の調査では、堆積した土層の検討を行った結果、低湿地または長期間低地化していたことが分かった。丸墓山古墳築造当時は存在したと考えられる西側と北側の周堀は、旧忍川の形成過程における氾濫等により開削されたものではないかと考えられる。旧忍川は、古墳時代にはここに流路を形成していなかったものと考えられ、旧忍川北側にある白山古墳群と埼玉古墳を同一とする考え方もあるが、地山の標高を比較した第17図を見れば、埼玉古墳群の台地は南側から旧忍川に向かって地形が下がっていることが分かる。このことから両古墳間には地形の変換点があり区別できると考える。しかし、稲荷山古墳の北西に見える小円墳跡と白山古墳側の台地は、ローム台地が連続していた可能性があり、明確に両古墳間に谷地形が存在したとは言い切れない<sup>(4)</sup>。

なお、稲荷山古墳東側のソイルマークで確認される小古墳から將軍山古墳北側にかけては、古墳時代の遺構・遺物は検出していないことから、埼玉古墳群の北東への広がりには若王子古墳までではないものと考えられる。一方將軍山古墳東側での内堀・中堤・外堀の検出は、予想された範囲で検出できたことは大きな成果である。

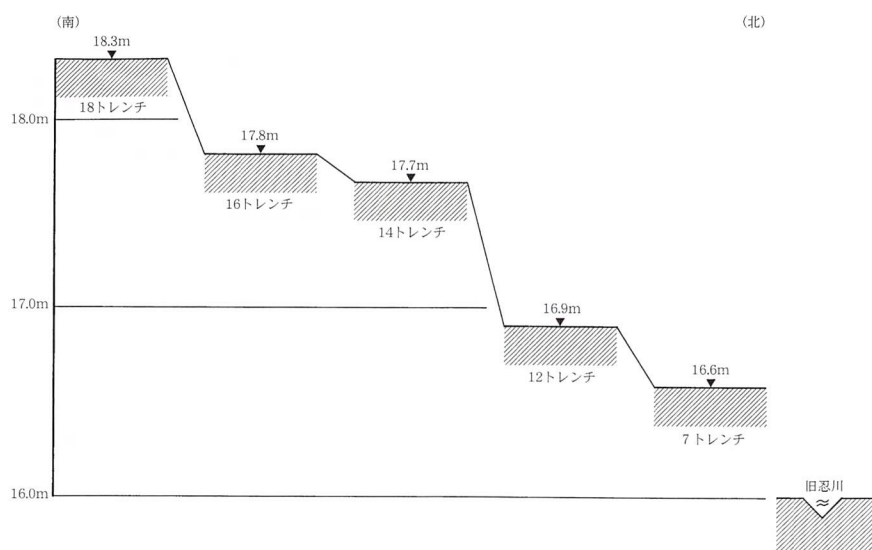
二子山古墳東側では、「シャングリ山」が古墳跡とされていたが、今回の調査で古墳の可能性が低いと判断され、さらに16・17トレンチにおいても古墳に関連する遺構・遺物が検出されなかったことから、二子山古墳から東側へは埼玉古墳群が拡大しないと考えられる。

奥の山古墳の南に設定したトレンチでも、古墳時代の遺構は検出されていない、このことは当古墳群の南端を考える上で、重要な意味を持つ。

埼玉古墳群の北から東側を回り南側を試掘調査したが、古墳時代の遺構・遺物は検出できなかった。このように、埼玉古墳群周辺の地形についてはだいぶ明確になってきた。



第16図 東西地形断面図



第17図 南北地形断面図

今回調査を行った古墳群東側について検出したローム層の面を比較したところ、東西では稲荷山古墳から東側にかけて低くなる傾向があり、途中の9・10トレンチの間には埋没谷があることが分かった。

南北では、奥の山古墳側が最も高く將軍山古墳の中堤検出面との比高差は、1.4mとなりさらに旧忍川に向かって傾斜している。旧表土下でのローム面の比較ではないので、正確な地形比較にはならないが西から東へと南から北側の旧忍川方向へ地形の変化があることが考えられる<sup>(5)</sup>。今後、これらのことを総合して埼玉古墳群の指定範囲拡大の基礎資料としたい。

今回調査を行うにあたっては、行田市世界遺産推進担当小巻政史氏、行田市教育委員会中島洋一氏、田島裕介氏の全面的な協力をいただき、作業には当館職員井上尚明・西口正純・石坂俊郎があたった。また、14トレンチ出土の瓦については(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団木戸春夫氏に御教示をいただいた。

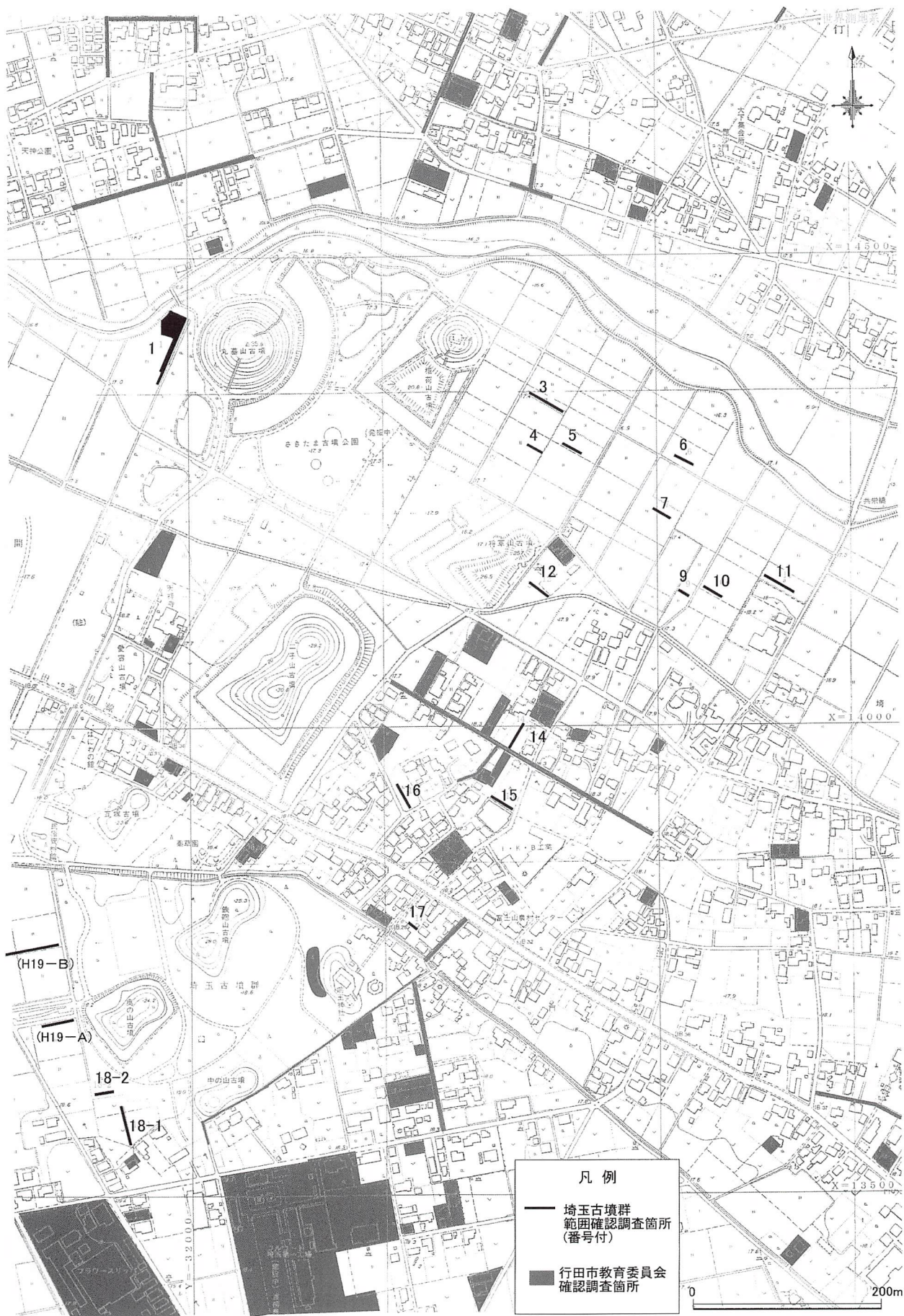
《註》

- (1) 平成15年度に確認面とされた面に相当する。
- (2) (株)パレオラボの観察によれば、長期間湿地的な環境にあったことが考えられるとする見解を口頭で得ている。
- (3) 調査の成果については、行田市教育委員会中島洋一氏の知見による。
- (4) 白山古墳群の中で最も旧忍川に近い白山愛宕山古墳まで、ローム層が確認されている。行田市教育委員会中島洋一氏の教示による。
- (5) 丸墓山古墳の旧忍川を挟んだ対岸を、平成21年11月に行田市教育委員会が行った試掘調査によれば、白山古墳群側(北側)から旧忍川(南側)へ緩やかな傾斜が確認されている。行田市教育委員会篠田泰輔氏の教示による。

《参考文献》

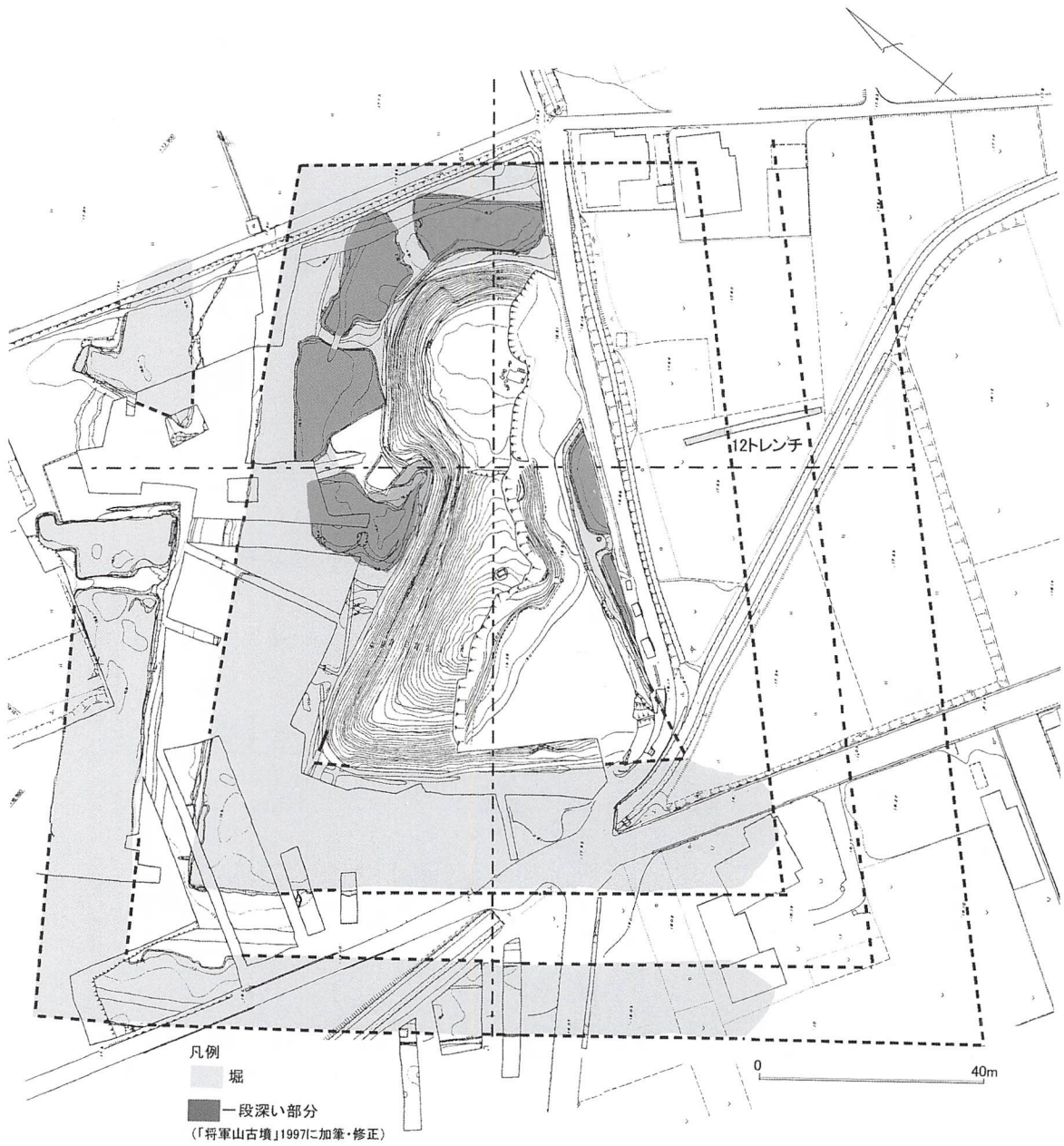
教育普及・調査研究担当 2005 『丸墓山古墳西方隣接地区試掘調査報告』埼玉県立さきたま資料館  
 埼玉県教育委員会 1994 『埼玉県古墳詳細分布調査報告書』  
 高木豊三郎 1936 『史蹟埼玉』埼玉村教育会  
 斎藤国夫・門脇伸一 1999 「鎌田氏館跡」『行田市文化財年報—平成8・9年度事業報告—』行田市教育委員会  
 西口 正純 2009 「埼玉古墳群周辺の範囲確認調査」『紀要』第3号 埼玉県立史跡の博物館





第18図 平成20年度埼玉古墳群範囲確認調査トレンチ配置図





第19図 將軍山古墳周堀復原図